

現場へ!

仙台市の精神科医、山崎英樹さん(59)は、認知症当事者の丹野智文さん(46)と出会って、人生の希望を学んだ。

医師になりたての20代、山崎さんは老人病院や精神科病院で、医療と人間の惨さに絶望していた。鉄格子のような柵に覆われ、手首にひもで縛られた痕がタコになるほど自由を奪われている人たち。糞尿の臭い。生きる力を根こそぎ奪い、人生をあきらめさせる医療の現実。「地獄はここにある」と思った。

専門職や家族、社会がこの光景を生みだしている。そして、その果ての痛ましい最期に自分も手を貸している。縛らない医療を率先したが、病院の限界も感じた。

1999年に独立。仙台に小さなデイケア診療所「いずみの杜診療所」を建て、これまで宮城県内に介護施設や作業所を作って、本人が入院せずに最後まで地域で暮らすための拠点を増やしてきた。

だが、職員にケアの大切さを一生懸命に説いても、どこか空々しい気がしていた。そんな2013年秋、丹野さんの存在を知った。

翌年6月。自身が代表を務める宮城の認知症を考える会に招いたのが出会いだ。丹野さんは、診断の恐怖や人生に課せられた苦悩を引き受けながら「同じ認知症の間を支えていきたい」と語った。認知症になったら何もわからない

認知症当事者はいま③

医師の僕こそ 希望を学んだ

いいのではない。絶望も希望もそして生きる態度も自分で決める。認知症の「私」を語る本人と初めて出会った。医療者として勝手に抱いていた偏見や人間への絶望感を吹き飛ばされた。それは「天の岩戸が開いたような」衝撃で、「僕自身が解放されていった」。

出会って2カ月後の夏、丹野さん夫妻を誘って「考える会」の一行14人で京都へ2泊3日の旅に出た。これが仲間として「水平な関係」の始まりになった。帰りの新幹線で、丹野さんと一緒に何かできないか、と考えたのが後の日本初の本人による本人のための相談窓口「おれんじドア」につながる。友人として東京の「認知症当事者勉強会」にも誘った。丹野さんは「社会を変えよう」とする藤田和子さんたち当事者の先輩と出会い、10月、初の当事者団体「日本認知症ワーキンググループ」結成に加わる。

丹野さんに出会って、本人の力を信じられるようになった山崎さんは、診断や治療についてもできる限り本人に話すようになった。目を見て、どんな思いをしているのかを尋ね、「脳に変化がありそうだけれど、でも診断前のあなたと今のあなたが急に変わるわけじゃない」と心を込めて話す。

認知症は、早期診断＝早期絶望といわれてきた。それは、医師が放った言葉による暴力が多くの当事者や家族を容赦なく打ちのめしてきたからだ。「自分も加害者の一人だった」と山崎さんはいう。希望をもたない医師が、希望を本人に伝えられるはずがない。「希望を知り、希望を信じるからこそ、医師に求められるのではないか」。それは医師が、「人」として、一人の当事者に出会うことから始まる。(生井久美子)



21

「昼、何食べた?」と
「忘れた」ことを聞くよりも
「夜、何食べた?」と
ワクワクすることを
聞いてほしい。



山崎さんの机にある丹野さんの目めくりカレンダー。当事者ならではの言葉の東だ。いずれも中井征勝撮影

山崎さんは丹野さんとの出会い、薬や治療も本人に相談して一緒に考えるようになった。当事者ネットワークの事務局も担う仙台市のいずみの杜診療所